

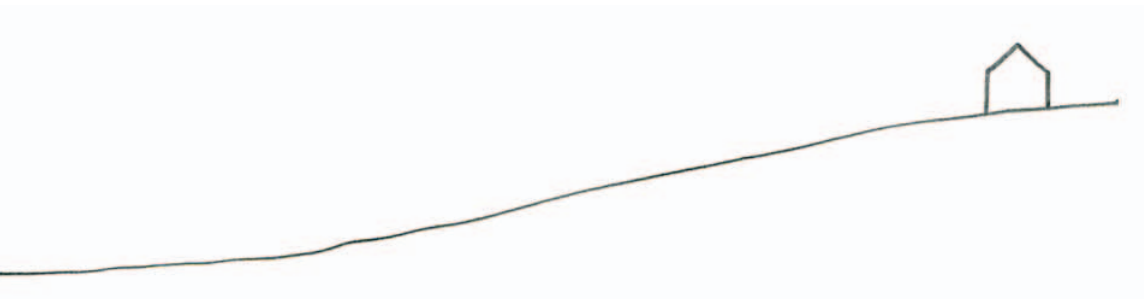
もうひとつの家

模型・写真・解説

gl / 佐々木夕介 + 関口聡美

物語

佐藤直彦



目次

はじめに	02
物語編	
屋根裏	04
猫道	06
本棚	08
マエストロ	10
湯船	12
ノラ	14
たいやき	16
解説編	
長い家	20
畑の小屋	22
屋根の家	24
丘の上の家	26
本棚の家	28
がらんどうの家	30
森の風呂小屋	32
あとがき	34

はじめに

「もうひとつの家」は、札幌の美容室 macro を会場に行われた、架空の建築プロジェクトの模型展です。macro の入口やカウンター、本棚など、店内の様々な場所の特徴を手がかりとしながら7つの建築/建築群をデザインし、その模型を展示しました。

タイトルの「もうひとつの家」とは、7つの建築をまとめるテーマのようなものです。たとえば“普段生活している家とは別に、田舎でのんびりするために小屋を建てる”とか、“家=1つの建物ではなく、2つ3つの建物の集合を1つの家と考える”などなど、私たちが見慣れている家、住み慣れている家とは少し違う家のあり方を、7つの建築を通して考えています。こんな建物があったら楽しいのになぁ…、こんな居場所があったら落ち着くだらうなぁ…など、身体が素直に反応する居心地のよさや空気感を大切にしながら、私たちの考える新しい日常としての「もうひとつの家」をデザインしました。

また今回、佐藤直彦氏に、7つの建築に合わせた7つの物語を創作していただきました。本の前半は物語編、後半は解説編となっています。イメージとしての建築と響き合う物語の世界を、どうぞ併せてお楽しみください。

屋根裏

こどもに戻りたいような気分の休日、いつまでもベッドのなかにいる。
横になったまま、目をとじたまま、そっと唄う。

雨のかんむり、かむっているの。
屋根のとんがり、とがっているの。

ここは屋根裏だとしよう。
誰も知らない屋根裏部屋があるとして。

屋根裏部屋に必要なものは、
日記帳と、家族の写真と、止まってしまった振り子時計。
たいせつなものだけに囲まれて、いとおいしい気持ちだけを抱いている。
ビスケットの缶と、眠ってばかりいる猫と、読み古した物語。
空想は広く、高く、どこまでも届く。

物語編

ぶどう酒の空き瓶と、清潔なシートと薄っぺらな毛布、
まだ履いたことのない赤い靴。
おとなになりたい憧れと、
おとなになるまでの短い猶予。
埃のつもった地球儀と、黴臭い旅行鞆と、
色あせた遠い国の絵はがき。
旅立つ日を待っている。
いや、旅人の到着を待っている。

青りんごのかおり、屋根を叩く雨音。
雨のかんむり、屋根のとんがり。
隠れているつもり。待ちくたびれているつもり。
屋根裏で人は何を待つのか、やり過ごすのか。

どこか、森の深い奥か、街の裏路地か。
誰も知らない屋根裏部屋があるとして。

横になったまま、目をとじたまま、
そっと物語がはじまるのを待っている。

猫道



これは町に住む猫たちから聞いたおはなしです。

猫たちから聞いたなんて信じられないというひとは、信じなくてもけっこうですが、どうぞ、わたくしのおはなしをすっかり聞いてから、もういちど、信じられないかどうかを考えてみてください。このようなできごとを見聞きできるのは猫くらいですから、やはり猫たちから聞いたに違いないと合点がいくことでしょう。

いっぴきのキジトラ猫が、猫道を歩いていたときのことで。明け方までふりつづいた雨で土はしめっていて、猫道には草のにおいがたちこめていました。

ふだんは見すごしがちですが、猫道というのはめずらしいものではなく、気をつけていればどこにでも見つけられます。たとえば、家があると、わたくしたちは家に気をとられてしまうものですから、家があって、となりに家があって、またとなりに家があって、家のとなりに家、家、家と家ばかりを見てしまうのですが、家と家のあいだをよくよく見てみると、それは「家と家のあいだ」ではなくて、じつのところ猫道なのです。ほかに、石堀のうえ、生け垣のなか、自動車のした、と思っているところが、じつのところ猫道だったりするのです。

いろいろなかたちに見せかけられた、ばらばらに思える隙間が、じつのところ、ひとつながりの猫道になっていて、町のおくのほうまでつづいているようですが、そこを歩けるのは猫たちだけなので、どこまでつづいているのかはわかりません。そもそも猫たちにしても猫道をよく知っているかといえば、そんなことはなく、よく迷ってばかりいるようで、くだんのキジトラ猫もふと気づいたときには見知らぬ細道に入りこんでいたのです。気づいたなら引き返せばよさそうなものですが、猫というのは好奇心にひげとしっぽをはやしたような動物ですから、そのさきになにがあるのだろうかと見知らぬ細道のさきへ進んでいきました。

そこはもう、人も車も通らない、猫さえも通ることをためらう、風の通り道でした。草のにおいのする風に吹かれながらキジトラ猫がさまよいこんだところは、それまで見たことも聞いたこともないような、細長い町だったのです。



本棚

読み終わるのに百年かかるのではないかと思えたガルシア＝マルケス『百年の孤独』だったが、どうにか雪の降るまえに間に合った。図書館通りのイチョウ並木はあざやかな黄色に染まっていた。

その日の返却カウンターにはハル子さんが座っていた。ハル子さんというのは、ぼくが勝手に決めて、内心で呼んでいた名前だ。ぼくはいつも、読み終えた本をハル子さんに手渡すことに、ささやかな喜びを感じていた。『百年の孤独』の返却を受けつけたハル子さんは、ほほえんで、「ようこそ、百年クラブへ」と言った。そして、ぼくをカウンターのなかへ招き入れた。

事務室の奥にある重そうな扉から、閉架書庫へ入り、天井までの無愛想な書架に挟まれた薄暗い通路を奥へ奥へと歩いていった。靴底がコンクリートの床を叩くんだけど、足音は紙に吸い取られるようで、あまり響かない。暗い書架を抜きたいちばん奥の壁にある小さな扉を、ハル子さんが開くと、そこは森だった。紅葉した木々のなかをまたしばらく行くと、温室のような建物が見えてきた。

森はあまりにも静かだった。小鳥のさえずりが聞こえる程度で、図書館通りを行き交っているはずの自動車の音も聞こえてこない。だいたい図書館の

周りに、こんな大きな森があったらどうか？

「百年クラブに招待されるのは『百年の孤独』を読み終えた人のなかでも、特に熟達の読書家だけ」とハル子さんは言った。「まだ若すぎると反対する会員もいましたが、どうしてもあなたの力を借りなければならないといって、館長が決定しました」

ぼくにはハル子さんの言っていることが少しもわからなかった。いったいどういうクラブなのか。どうして、ぼくの知らないところで、ぼくのことを話しあわれているのか。わけがわからないまま、ハル子さんのあとについていった。温室のように見えていた建物は、近づいてみると本棚でできた回廊のようなものだった。

そして森の本棚の家に足を踏み入れたのだけど、それがトムもハックも経験しなかったような冒険のはじまりだった。ハル子さんに連れられて建物に入っていく、そこで図書館長に引き合わされた。館長はぼくをじろりと見ると、あいさつもなく、一方的に話しはじめた。「ようやく読み終わりましたか。ずいぶん待ちましたよ。ちなみに図書の貸出期間は二週間です。いや、しかし、とにかく間に合ってよかった。さっそくですが、あなたにお願いしたいことがあるのです」

マエストロ

丘のうえに宝石箱のような家がたっていました。

あのきれいなおうちに住んでいるのは、いったいどんな人なのか、知りたくて、学校からの帰り道、帰り道をそれて、丘をのぼっていき、そこでマエストロに出会ったのでした。その家にマエストロはひとりきりで住んでいました。

いつも彼のことをマエストロと呼んでいたもので、ほんとうの名前は知りません。

背伸びをして、窓から覗くと、燕尾服で指揮棒を振るうしろ姿が見えました。踊っているようでもあり、たたかっているようでもありました。そこで演奏されていたのはベートーベンの交響曲第七番でしたが、彼のオーケストラにはたったひとりの楽団員もいなかったもので、演奏は耳には聞こえませんでした。それでもマエストロの第二楽章アレグレットは、くるおしく、甘く、香りたつようで、こどもごころにむせかえるような印象を受けたことを今でも覚えています。

最後に残ったチェリストをやめさせたのがもう十五年前だとマエストロは言いました。ここには完璧な音楽があるのと言って、ベートーベンというよりもアインシュタイン博士に似たモジャモジャ頭を叩きました。誰ひとり完璧な音を鳴らせやしなかった。バイオリンも、フルートも、トランペットも、みんな雑音を鳴らしてばかりだった。だから、みんなやめさせた。誰もいなくなって、完璧な音楽だけが残った。

聞こえるかい、宇宙を解き明かす方程式のように美しい、この音楽が。

しばしば丘のうへの宝石箱のような家を訪ねるようになり、マエストロからピアノを教わるようになりました。ピアノ教師としてのマエストロは意外にも丁寧で親切でしたが、ご機嫌は晴れたり曇ったり。

上機嫌のマエストロは、わたしの拙い練習曲をおおげさにほめてくれました。「すばらしい指さばき、きみは必ず一流のピアノ弾きになる、そして、わがオーケストラとピアノコンチェルトを演奏しよう」。機嫌のわるい日には、ピアノに触れようとせず、マエストロはつぶやくように話していました。「きみも知っているだろう。ベートーベンは耳が聞こえなくなった。彼は幸運だ。わたしの耳にはまだ雑音が聞こえる。完璧な音楽が逃げていく」。

わたしはマエストロのたったひとりの友人でした。わたしは友人として、彼のためにできることを考え、実行することにしました。つまり、彼のオーケストラのために団員を集めようと思いついたのです。



湯船

本日お集りのみなさまには、私が世界湯船会議に出席した際の見聞をお話することになっております。

このたびの会議では、湯船を臨水環境におくことにより入浴論と船舶論の大統一理論を構想するという、実に大きなテーマが掲げられました。ともすれば広げすぎた大風呂敷とも受け取られかねませんが、決して単なる大言壮語ではなく、まさに新時代への湯船の出航の瞬間とでもいうべき、記念碑的な会議であったと、私は確信しております。

船舶にとって「内空外水」が絶対的な原則であるところ、湯船においては例外的な逆転構造が見いだされ、この特異点こそが船舶技術史の謎を解明する糸口だろうということは、古くから指摘されてきたところです。

みなさまは入浴文化の観点から湯船にご興味をお持ちのことでしょうから、湯船の船舶技術史的側面に精通している方は少ないかと思っておりますので、このあたりのことはのちほど詳しく解説いたしたいと考えております。

さて、さきほどご紹介いただきましたとおり、私は国際船舶評議会の評議員という立場で世界湯船会議に出席いたしましたので、会議の様子をお伝えするまえに、まず、私が招待を受けた経緯からお聞きいただこうかと思います。

その年の春さき、ちょうど、梅が咲いたあと、桜が咲くまえ、雪解けで勢いを増した川がどおどおと音を立てるころ、私のもとに任命通知が届けられました。

紺の背広をきた小さな紳士が訪ねてきて、「このたび、あなたが国際船舶評議会の評議員に選ばれましたことを謹んでお知らせもうしあげるとともに、榮譽ある任に就かれましたことにお祝いもうしあげます、さて、僭越ながら評議員としての心得をお伝えしますと……」といった調子で口上を述べはじめたのですが、これが、アパートの玄関さきでやけに通りのよい声でもって朗々とやるものですから、また隣のおかみさんから小言をくうんじゃないかと内心ひやひやしておりました。





ノラ

市民菜園団地の小屋に泊るなんて、わたしが思いつくようなことではなく、トワ子さんから一緒に泊ろうと誘われたのだった。月見をしたいからと。

興味というのは人それぞれで、ある人は野球チームの継投策を、ある人は今年流行のスカート丈の数センチを、ある人は流星群を観られる夜の天候を、そこに興味のない人には理解しがたい熱心さをもって、気にかける。わたしの興味は、人と野菜に向けられている。ふたつの興味の交差点に、トワ子さんは立っていた。

人への興味といっても、人類というような大きなくくりでの関心ではなく、そのときどきのおとなりさんへの興味であって、たとえば、地下鉄でおとなりに座った人の読んでいる文庫本に書店のカバーがかけられていて書名も作者も知ることができないとき、あるいは、カフェのおとなりのテーブルで口論をはじめた男女の抑えた声が聞きとれず諍いの種さえわからないとき、など、興味はむらむらとわきおこり、かきたてられ、しかし行き場はなく、これはやるせない。

おとなりさんとわたしのあいだには、一時的にとなりあった位置関係のほかに関係はなく、彼らの読書も口論も、わたしには関係のないことだ。ぜんぜん、ちっとも、関係ない。わたしには関係

のないことが多すぎて、わたしだけが関係の輪のそとに立っているような、少々おおげさな気分にもなる。なるときもある。こういうのをデラシネというのではないか。フランスでは。いや違うか。

野菜への興味は単純に満たされやすい。野菜に関してならば、長い歴史のなかで蓄積されてきた農業の技術や自然科学が、興味の熱心さに見合う分だけ応えてくれる。そして野良仕事を通じて、わたしは地面と関係する。成層圏にさわやかに吹く風も、微生物たちのものしずかな生活も、ぜんぶ、わたしとわたしの野菜に関係している。という実感があるのだ。ひしひしと。市民菜園団地の狭い畑と小屋を借りるようになってから、休日は野良仕事に忙しく、畑を耕していれば都市的なデラシネ気分は忘れられる。デラシネでなくとも、何かそのようなものは忘れられる。わたしには向いていると思う。泥にまみれているようなことが。

おとなりの畑のトワ子さんのことは、はじめて会ったときから気に入って、ただおとなりさんという以上の興味をもったけど、勤めのない彼女は平日に畑に来ることが多く、あまり顔を合わせる機会はなかった。親しくないどころか、ほぼ話したこともないのに、唐突に月見に誘われ、面食らいながら、うなずいていた。



たいやき

たいやきが今まさに焼きあがった店先を通りかかって、ためらうことなく買って帰ることにした。ひとりに二個ずつあれば満足できると、たいやき十個、買って、帰って、袋を開けるとまだ温かい湯気が立ち、甘い香りが漂い、しかし四人家族なのだから八個で足りたのに、と思ったところで目覚めたのが、今朝の夢だった。

ゆっくりと目覚めながら、余分の二個のたいやきに思いをめぐらせていた。ひとりに二個ずつ、五人分のたいやきを買ったのだろう。数えなかったつもりで、数えていた、もうひとりとは誰だったのか。考えるまでもなくわかっている。忘れたつもりで忘れていない、数えるつもりもなく数えてしまう。冬の夜に際限なく降りつづく雪が町を白く白く埋め尽くすように、日々は降りやまず、日々は降り積もり、日々に埋もれていく。

夜、何かのためではない場所に座っている。

夜は宇宙。陽に眩んだ眼が見失った宇宙。それとも、宇宙は夜、としたほうが詩的だろうか。宇宙は夜。朝を迎えることのない永遠の夜。茫漠たる宇宙空間は今夜も黒く黒く晴れあがっている。地上に何かのためでもない場所がどれだけあるだろうか。意味の世界に小さく残された余白に、イスを置いて座っている。晴れあがった宇宙を見上げ、新しい星座に新しい名前をつけている。

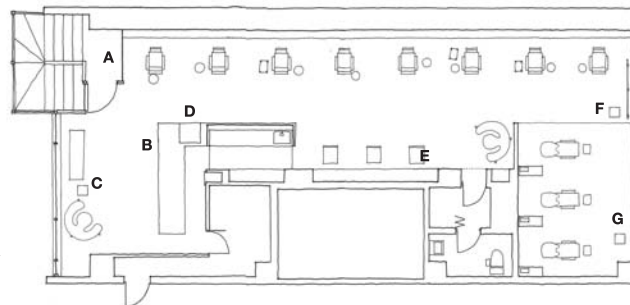
ごらん、冬の夜空いっぱい大きく大きく広がった、たいやき座。



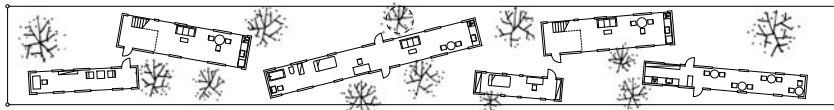
長い家



解説編



- A: 長い家
- B: 畑の小屋
- C: 屋根の家
- D: 丘の上の家
- E: 本棚の家
- F: がらんどうの家
- G: 森の風呂小屋



配置平面図 S=1/700



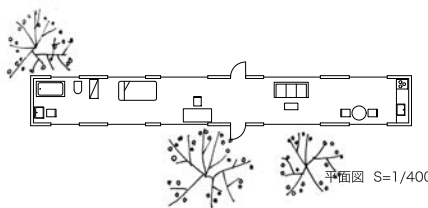
全体立面図 S=1/700



立面図 S=1/400



断面図 S=1/400



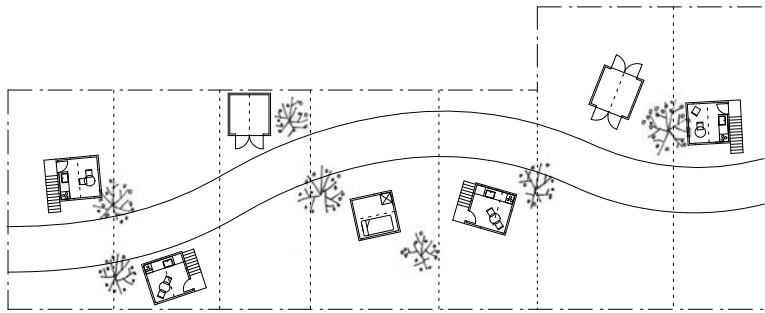
平面図 S=1/400

macroを訪れるとき、ほとんどの人は札幌の街を歩いてくるといいます。そこで入口に置く建築では「歩く」ことをデザインに取り込みました。また、店内が見える大きなガラス壁に設置することから、透明感も意識することにしました。

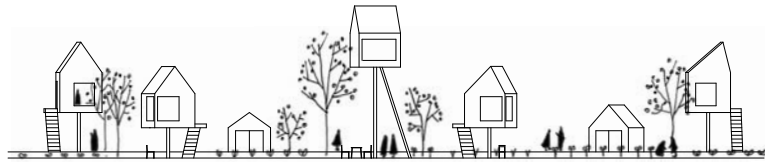
まず細長い敷地に細長い建物をいくつか置きます。住む人は長い家の中をひたすら歩きながら生活します。部屋を仕切る壁はなく、壁の代わりに距離感が各スペースを分けてくれます。さらに、窓を大きくして位置を揃えることで、建物を貫いて反対側の景色が見えるようにしました。家が並んでいるにもかかわらず向こう側が透けて見える、そんな不思議な風景が生まれます。

畑の小屋

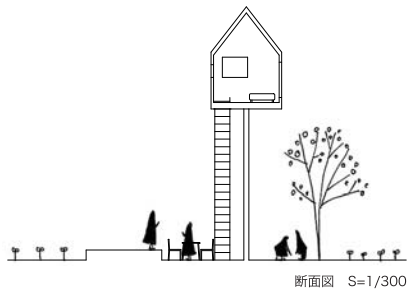




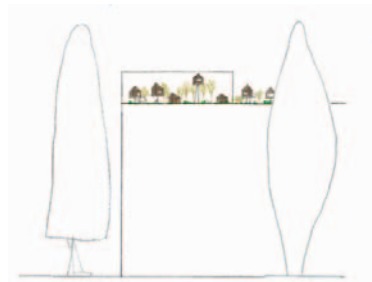
配置平面図 S=1/500



全体立面図 S=1/500



断面図 S=1/300



断面図 S=1/300

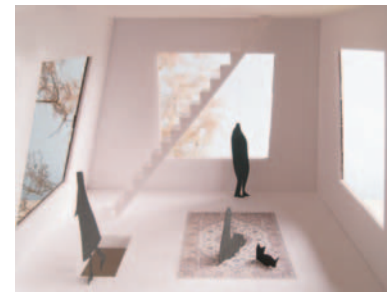


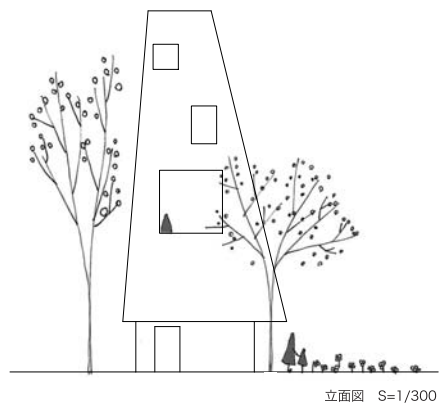
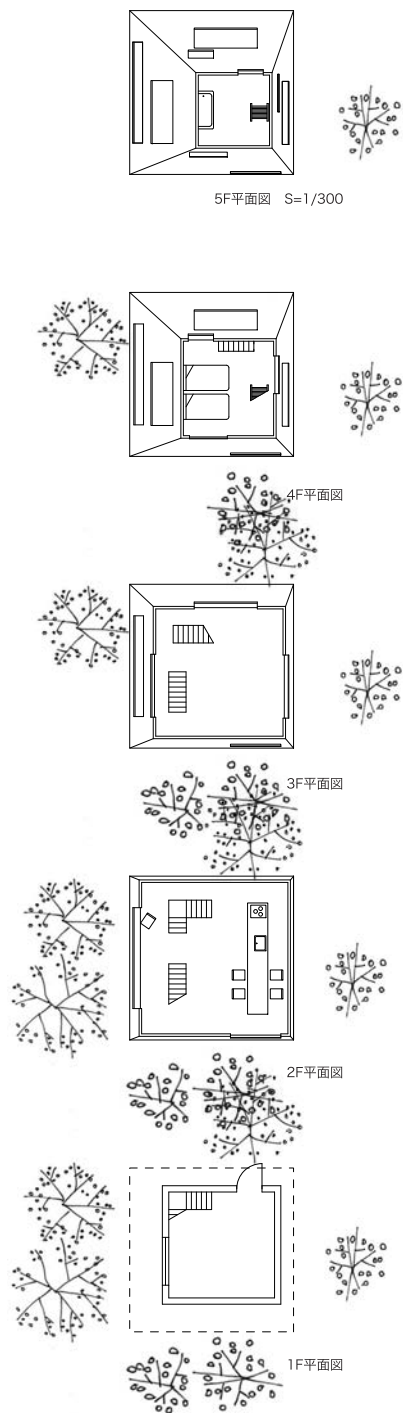
macroに入ると、カウンターの向こうから、明るくて元気で素敵なスタッフが元気に挨拶をしてくれます。そんなmacroのスタッフが作る雰囲気を思い浮かべながら、カウンターに置く建築を考えました。

小さな小屋が付いた畑が横に7つ並んでいます。そして畑を繋ぐように幅の広いウッドデッキが横断しています。小屋は寝るためだけのもの、キッチンだけのもの、農器具などを入れる納屋みたいなものといろいろあります。

小屋の高さもそれぞれ違ってきます。高い小屋では、広がる畑や空を眺めて眠りにつきます。低い小屋の下ではお昼ご飯（採れたての野菜とか）を食べます。広いデッキではわいわいと収穫祭も行えるでしょう。広い畑と小さな小屋が集まって、明るくて元気な風景をつくり出しています。

屋根の家

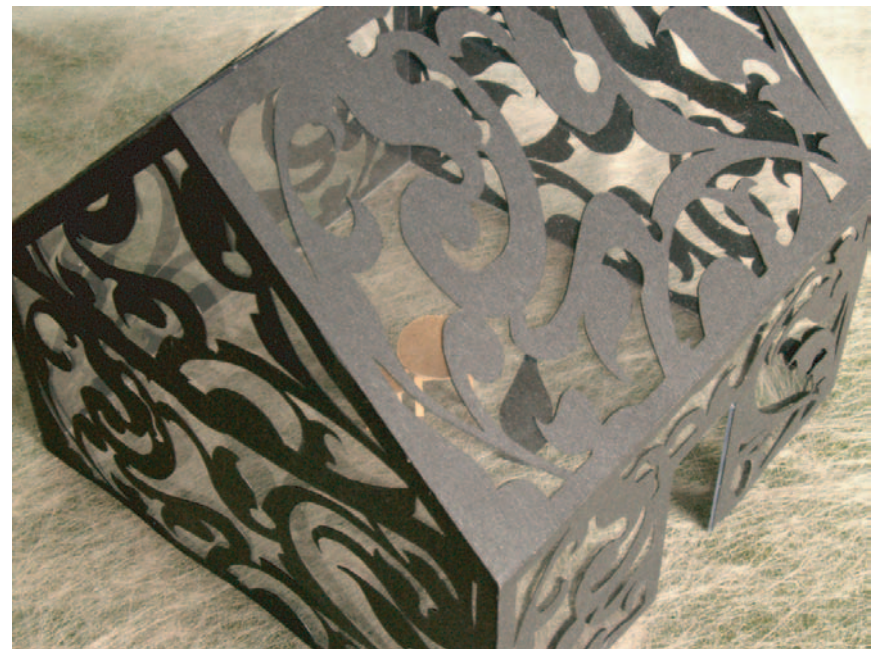


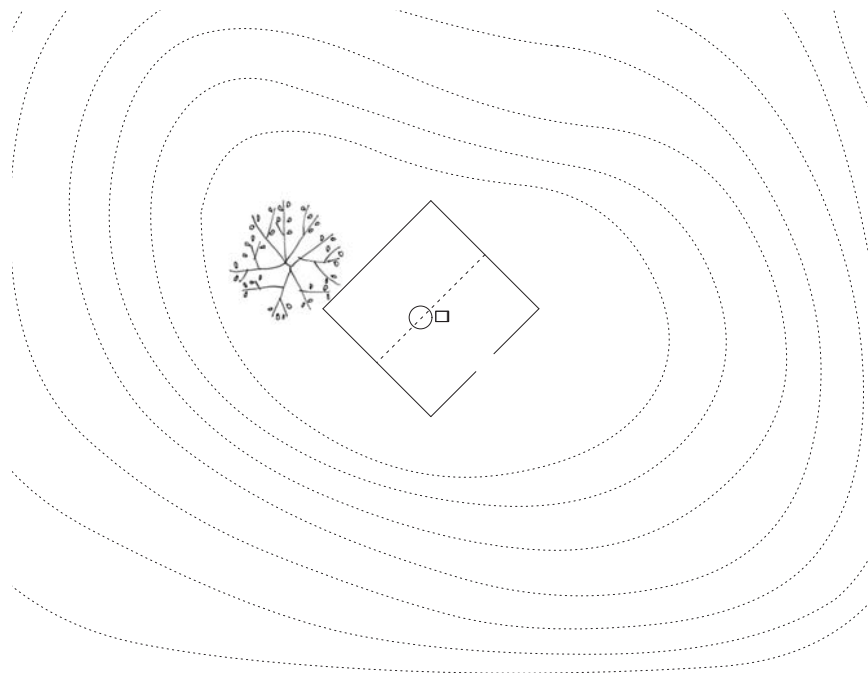


ウェイティングスペースの特徴は「待つ」ことです。待つあいだにmacroの雰囲気を感じたり、ぼーっとしたり、窓から外を眺めたり、置いてあるフライヤーを眺めたり……そんな待つ人の行為を建築に取り込めたら、楽しいのではないかと思います。

そこでウェイティングスペースの模型は、背の高い家、屋根が変に長い家を考えました。周りには家とほぼ同じ高さの木が生えていて、フロアによって、見える風景が変わってきます。低いフロアでは木の幹がよく見えたり、高いフロアでは葉っぱの茂っている様子が見えたり(まるで葉っぱの中にいるように)。さらに屋上では枝の先と空が見えたり……と木を眺めながら、ぼーっとしながら過ごす家になっています。

丘の上の家

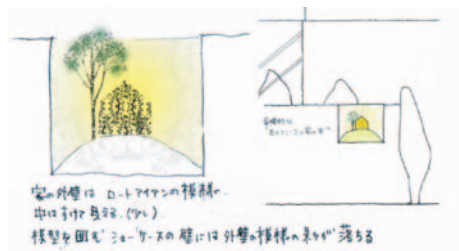




配置平面図 S=1/300



立面図 S=1/300



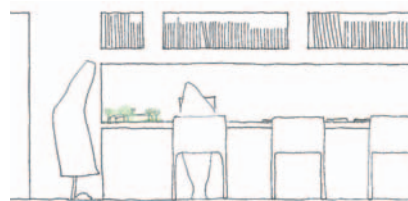
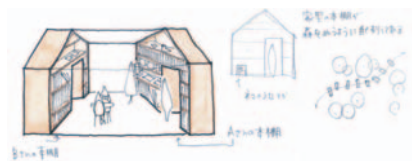
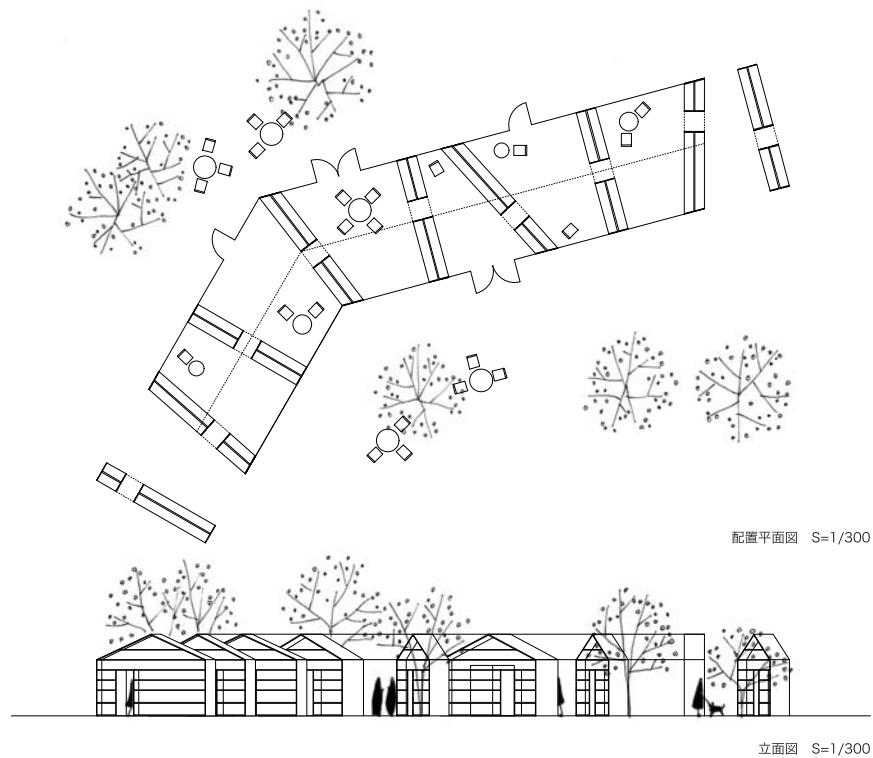
立面図 S=1/300

macroのカウンターには大きなへこみがあります。そこはショーケースのような場所なので、綺麗な展示物のような建築を置きたいと考えました。そこに住む人はもちろん、住んでいない人にとってもお気に入りの家になる、宝石箱のような建築を作れたら素敵だな、と考えました。

小高い丘に1本の木と1軒の家がぼつりと建っています。この家の外壁は薄い鉄の板でできていて、草花の形にくり抜かれています。家に明かりが灯ると、草花の模様で縁取られた家のシルエットが影絵のようにくっきりと浮き出てきます。

本棚の家





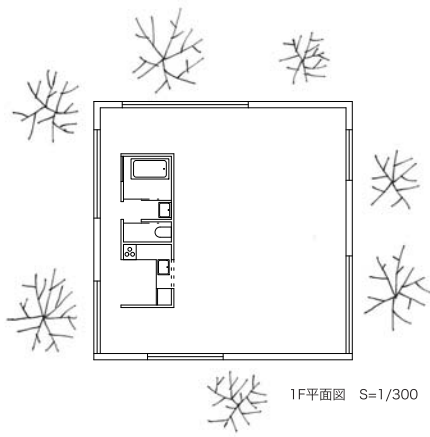
macroの本棚にはいろんな本が並んでいて、小さな読書スペースがあります。店内の雰囲気を感じながらちょっと本の世界に入って行く……これもmacroへ行く楽しみのひとつ。この読書スペースに模型を置くことにしました。

森の中に本棚を作ろうと思いました。家の形の本棚が森を縫うように並んでいます。これは何人かの人のための本棚です。たとえば、サトウさんの本棚には建築の本が並んでおり、その隣にあるタカハシさんの本棚には猫の本がならんでいます。建築の本と猫の本が向かい合わせになって、本棚の間には不思議な場所が生まれます。

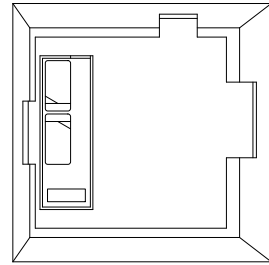
がらんどうの家



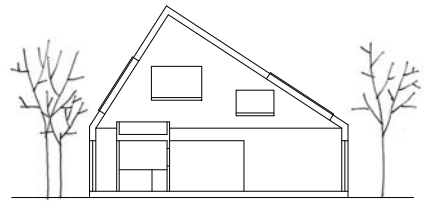
森の風呂小屋



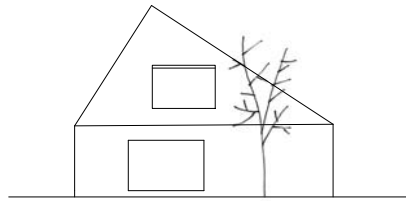
1F平面図 S=1/300



2F平面図



断面図 S=1/300



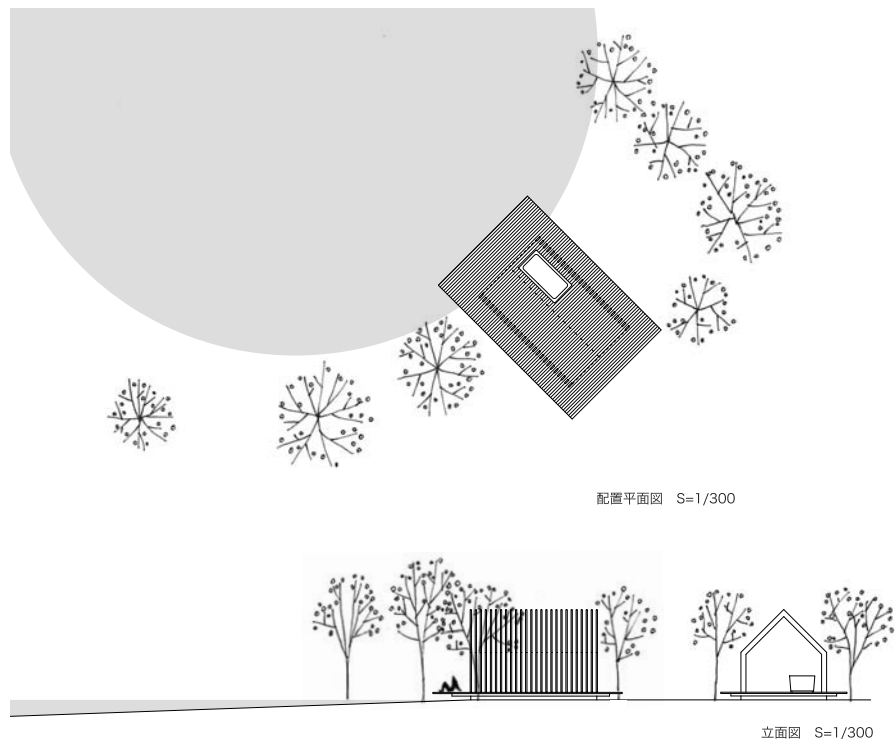
立面図



macroの奥には、何も飾られていない真っ白な壁があります。この何もない余白の壁を見て、とにかく大きくてガラ〜ンとした何もない家を連想しました。

建物は大きくして、キッチンやトイレや風呂を小さな箱にまとめ、ベッドは箱の上に乗せます。すると残りの空間は自由に使える大きな部屋になります。背の高い植物を置いたり、乗ってきた自転車を壁に立て掛けたりなど、まるでガレージや倉庫に住んでいる気分。屋根や壁には巨大な窓が開いているので、家の中は外のように明るくなり、外の樹木もたくさん見えます。





macroのシャンプスペースは、店の奥の窓の前にあります。ほんのりと明るい静かな場所で、目を閉じて髪を洗ってもらうのは、気持ちがよくてリラックスする時間です。チャブチャブという水の音に身を任せると思わず寝てしまいそうになります。そういう水のもつ雰囲気や、建築のデザインに活かしました。

ここでは、北欧の人々が所有している小さなサウナ小屋を参考にしながら、小さな池のほりに建つ風呂小屋をイメージしました。地面や水面から少し浮いた木製のデッキに、こぢんまりとしたトンネル状の小屋が載っています。小屋には大きな浴槽だけがあって、そこでお湯に浸かりながらぼーっと池を眺めて水の音に耳を澄まします。水に触れて、水を眺めて、水の音を聞く。ただそれだけのシンプルな小屋で、身も心もリラックスです。

あとがき

ある日、macroのshunさんから「店に建築の模型を置きたい」という電話が来ました。突然で驚きましたが、とても楽しそうなお話でした。その後、打合せを重ねるなかで、テーマや展示方法などが徐々に決まっていきました。

建築模型は実物の建築と比べるとスケールが小さく、残念ながら敷地があって、周りに木が生えていて、見上げれば空があって…というわけにはいきません。そんな状況で模型によって自然を感じてもらうために、たとえば、樹木を色んな高さから見る、森を歩く、丘を登る、池を眺める、畑を耕すなど、自然と触れ合う欲びを身体的に感じられるような建築を考えました。また、田舎に別荘や小屋を建てる「もうひとつの家」というテーマについても、私たちが暮らす北海道ならではのリアリティをデザインに反映させています。建築における重要なテーマでもある自然や地域性について、なるべく日常の身体感覚を通して考えることを意識しました。

さらに、私たちの考えた建築に佐藤氏の物語を添えるというアイデアは、この本の検討段階で思いつきました。「イメージであること」という共通性をもつ模型と物語。それらが重なり合うことで、見る人の想像力を掻き立てる独特な表現となる予感があったのです。そこでスケッチ段階の案を佐藤氏に見せて大まかな概要だけを伝え、自由に物語を考えていただきました。結果的に、写真や図面だけでは伝わりきらない、匂いや音、温度や湿度、建築の情景や空間の雰囲気のようなものを、豊かに表現できたのではないかと感じています。

さいごに、夜遅くまで模型の製作に協力して下さった室蘭工業大学の渡辺拓哉氏、素敵なお話を執筆して下さった佐藤直彦氏、いつもにこやかに対応して下さったmacroのスタッフのみなさま（と可崇くん）、そして、このような素晴らしい機会を与えて下さったmacro代表のshunさんに、心より感謝申し上げます。

2008年12月15日

佐々木夕介・関口聡美

プロフィール

gl (ジーエル)

2007年、佐々木夕介と関口聡美が設立したユニット。北海道室蘭市を拠点に、建築やインテリア、グラフィックなど幅広い分野でのデザインを行う。北海道という環境や人々の生活スタイルを大切に、新しい日常のデザインについて考えている。

佐々木夕介 / sasaki yusuke

1976年生まれ。北広島市出身。札幌西高卒。室蘭工業大学で現代建築の創作論や身体論について研究しつつ、建築やインテリアの設計に携わる。在学中に友人と「WALNUT」を結成し映画祭やライブイベントなどを開催。2007年博士課程修了後「gl」を結成し、本格的に設計・デザイン活動を開始。現在、日本工学院北海道専門学校非常勤講師。

関口聡美 / sekiguchi satomi

1977年生まれ。滝川高校卒業。2005年室蘭工業大学建設システム工学科修士課程修了。大学では現代建築とその地域性について研究。設計事務所勤務を経て、2007年「gl」を結成。現在、日本工学院北海道専門学校非常勤講師。

佐藤直彦 / sato tadahiko

1976年生まれ。札幌市出身。札幌市在住。
www.walnut.jp

もうひとつの家

発行日

2008年12月20日

編集・発行

gl / 佐々木夕介 + 関口聡美

模型・写真・解説

gl / 佐々木夕介 + 関口聡美

物語

佐藤直彦 (walnut)

模型協力

渡辺拓哉 (室蘭工業大学)

協賛・展示会場

macro (札幌市中央区南3西1)
www.macro-lab.com

印刷・製本

gl (室蘭市高砂町1-42-5-2FL)
www.ground-line.net

glのウェブサイトから、この本のPDFデータをダウンロードすることができます。